

停留睪丸を伴った先天性陰茎捻転症の1例

久留米大学医学部泌尿器科学教室（主任：重松 俊教授）

大学院学生 嶺 井 定 一

CONGENITAL PENIS TORSION WITH RETENTIO TESTIS

Teiichi MINEI

From the Department of Urology, Kurume University School of Medicine

(Director : Prof. S. Shigematsu, M. D.)

A case of congenital penis torsion with retentio testis in a 4-year-old boy was reported. This is the twelfth reported case of congenital penis torsion in Japan.

Discussions were made on several points of this disease with references to the literatures.

I 緒 言

先天性陰茎捻転症は Verneuil (1857) によつて初めて報告され欧米においては既に20例以上報告されている。本邦においては松田(1939)がその1例を報告して以来、現在迄11例を数えるのみで稀な疾患である。Jacobson (1893) は合併奇形のないものはないと述べているが、本邦における報告例では11例中1例に尿道奇形を認めているのみで他の例では奇形は認められていない。

私は最近左停留睪丸を伴った本症の1例を経験したので報告する。

現症：体格中等度，栄養良好，胸部及び腹部には異常は認めない。陰茎は時計針の進行方向と反対に捻転しており，外尿道口は水平位をとり陰茎縫線は螺旋状



第 1 図

II. 症 例

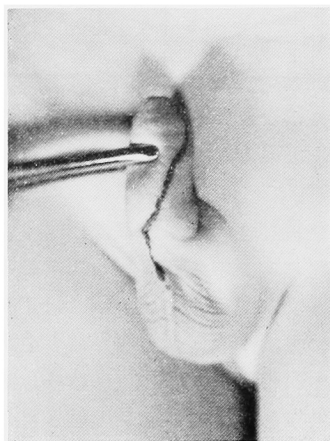
患者：池○秀○，4才。

主訴：尿線の方角異常。

家族歴：特記すべきものなし。

既往歴：妊娠経過には異常はなく，母親は妊娠中ホルモン投与，特殊薬剤の投与及びX線照射等を受けた事はない。満期安産で生下時体重 3.2kg。母乳栄養法により発育は良好で病気した事はない。

現病歴：患者が3才になるまでは家族のものは気づいていないが，2才下の弟が立つて排尿しえる様になつてから弟の尿線に比し患者の尿線が直線とならず，左方に飛ぶのに気づき母親に訴える様になつた。最近では羞恥心のためか人前では排尿しなくなつた。



第 2 図

を呈している(第1, 2図) 右辜丸は触れるが, 左辜丸は陰囊内には触れず鼠径靱帯直下に停留している。尿所見, 帯黄色透明, 蛋白(-), 糖(-), ウロビリノーゲン(±)。レントゲン検査では腎・膀胱部単純, 排泄性腎盂撮影に異常は認めない。

III. 考 察

本症の発生原因については Campbell (1954) は陰茎海綿体の不均衡な発達によるものであろうと推論しているが確証はなく, Schwartz & Farr (1957) は胎生期の欠損は明らかに示し得ないと述べ全く不明である。しかし斯波等 (1962) は V. dorsalis penis superficialis の走行異常のため血行障害を原因と考えてもよいと思われる1例を報告している。

本症の報告例は少く欧米においては Verneuil (1857) の1例を始めとし, Rocher (1910) は文献上より8例を蒐集し自験例11例を加え計18例を報告している。其の後, 彼は1922年に1例を追加報告している。近年に到つては Schwartz & Farr (1957) の1例, Scott et al (1960) の2例の報告を見る。本邦においては松田 (1939), 原口 (1960), 井上 (1960), 三浦 (1961), 平田 (1962), 斯波等 (1962), 斯波等 (1963) の各1例及び斎藤等 (1964) の4例, 計11例が報告されているのみで本症例は12例目に当る(第1表) この様に本症の報告例は内外において非常に少ないが, これは排尿及び性交時の障害等がほとんど認められないため医師をおと

第1表 本邦における先天性陰茎捻転症の報告例

	報告年度	報告者	年 令	主 訴	捻 転		奇形合併	治 療	転 帰
					方 向	角 度			
1	1939	松田	31			60°			
2	1960	原口・他	23	陰茎捻転	時計針進行方向 反対廻り	90°	無し	包皮の部分切除	軽快
3	"	井上	27	"	"	"	"	陰茎白膜減張術	効無し
4	1961	三浦	5	陰茎の形態異常	時計針進行方向	"	"	陰茎皮膚筋膜より 剥離矯正	"
5	1962	平田	3		"	270°	"	"	"
6	"	斯波・他	34	陰茎の形態異常	時計針進行方向 反対廻り	180°	"	陰茎筋膜と陰茎 係蹄靱帯とを縫 縮	軽快
7	1963	"	32	陰茎の形態異常 整復術を希望	"	90°	"	"	"
8	1964	斎藤・他	47	頻尿	"	"	"	無治療	
9	"	"	32	"	"	"	"	"	
10	"	"	26	排尿痛	"	"	尿道中隔	"	
11	"	"	25	無し	時計針進行方向	"	無し	"	
12	1965	嶺井	4	排尿障害	時計針進行方向 反対廻り	"	左停留辜丸	"	

ずれるものが少ない為であろうと思われる。従つて文献上に現われてない症例も少なくないものと思われる。

茲に自験例を含めて本邦報告12例について考察を加えてみる。年令別: 0~10才が3例, 21~30才が4例, 31~40才が4例, 41才50才が1例である。主訴: 陰茎の形態異常を主訴として来院せるものは5例, 其の他は頻尿, 排尿痛, 身体検査等別の症状で来院し発見されたものである。捻転状態: 捻転の方向は12例中時計針の

進行方向とは反対廻りが8例, 進行方向廻りが3例, 不明1例でありほとんどが時計の進行方向とは反対廻りである。捻転角度は12例中90°が9例, 270°, 180°, 60°が各1例であり, そのほとんどは尿道開口部が陰茎縫合線と一致していない。合併症: 本症は尿路系に奇形を合併することが多いと言われ, Jacobson (1893) は合併奇形のないものはないと述べ, 欧米ではそのほとんどが上部尿路の奇形, 尿道上裂, 尿道下裂等の合併を伴っていることを報告してい

る。しかし本邦における報告例では斎藤の報告例に尿道中隔を認め、本症例に左側停留睪丸が認められるだけで他の例には全く泌尿器科的奇形の合併は認めない。治療：現在迄に本症の治療は陰茎白膜減張術（井上），陰茎皮膚筋膜の剝離矯正術（三浦，平田），陰茎筋膜と陰茎係蹄靱帯との縫縮（斯波等）等が行われ，排尿障害に対しては包皮切除（原口等），外尿道切開術等が選択的に行なわれている。しかしこれら整復術の結果は思わしくなく，施行例6例中完全に矯正されたものは1例，軽快したものの3例，無効2例である。この様に本症に対する整復術は殆んど不成功に終ると云われているため，合併症としての異常あるもの及び高度捻転あるもの以外単なる形態上の理由から観血的療法を施行する必要はないものと思われる。以上の事を考慮し又本症例においては年令的に幼少であることより整復術は行なわず経過を観察している。しかし斎藤等も述べている如く患者の羞恥心等の精神的負担を考えると整復術を施行しその負担を除く事も必要であろうと思われる。

IV. 結 語

4才の男児で，左側停留睪丸を伴う陰茎捻転症の患者について症例を報告すると共に陰茎捻

転症について若干の考察を行なった。

（稿を終るに当り，御指導御校閲を賜った恩師重松教授に深く感謝致します。）

文 献

- 1) Campbell, M. : Urology, Philadelphia & London, W. B. Saunders Co., 1 : 399, 1954.
- 2) 原口・井口・山脇：日泌尿会誌，**51** 534, 1960.
- 3) 平田：日泌尿会誌，**53** : 59, 1962.
- 4) 井上：日泌尿会誌，**51** : 534, 1960.
- 5) 井上：日本泌尿器科全書，金原出版，**6** : 195, 1960.
- 6) Jacobson, W. H. A. : Schwartz & Farr より引用.
- 7) 三浦：臨牀皮泌，**15** : 211, 1961.
- 8) 松田：皮紀要，**34** : 164, 1939.
- 9) Rocher, H. L. : Schwartz & Farr より引用.
- 10) Schwartz, J. W. & Farr, J. L. : J. Urol., **78** : 425, 1957.
- 11) 斎藤・塚田：臨牀皮泌，**18** : 1087, 1964.
- 12) 斯波・国島：臨牀皮泌，**16** : 1081, 1962.
- 13) 斯波・国島：臨牀皮泌，**17** : 599, 1963.
- 14) Verneuil : Schwartz & Farr より引用.

（1965年5月6日特別掲載受付）